

今年度は、今までの1年とは違う。今までは、前に進んでいけばよかった。先のことを考えていけばよかった。これは、ある意味、楽である。ところが、進むべき前や先がないとなると、今までのようにはいかない。

人探しをしていた。なかなか見つからず、教え子にも連絡をした。それがきっかけで、昔のことが蘇ってきた。一度、スイッチが入ると、断片的な記憶がつながり始める。

連絡をとった教え子は女子ソフトテニス部だった。彼女たちが2年生になるタイミングで私が現れた。彼女たちの部活動は一変した。それまでは、支部大会1・2回戦レベルのチームだった。練習に行ってみた。「あれっ」意外と、ちゃんとやっている。顧問の先生のお陰だった。その顧問の先生は、専門であるのに、私に主たる指導を任せてくれた。

私は、秋の新人大会では勝とうとしていた。そのためには、夏が問題だった。致命的な問題として、学校にテニスコートがなかった。平日は、近くの公民館のテニスコートを借りていた。それも、大会では使用することがないハードコートだった。週末になると、地域の方が使用するため、使えなかった。かなり厳しい環境だった。これがかえって私に火をつけた。

私に火がつくということは、生徒が大変になるということである。私が勝つというのは、県大会出場である。生徒も勝ちたいとは思っているが、支部大会で上のほうにいくぐらいの感覚だっただろうと思う。県北大会などと言ったところで、出たことがないのだから、わかるはずがない。女子ソフトテニス部は、まだ創部3年目だった。男子は、1年目だった。

週末は、出かけるしかなかった。幸いにも、近くの高校にテニスコートが4面あり、そのうちの2面を貸してもらうことができた。隣では、私の前任校での教え子が練習をしていた。夏休みの練習場所も何とか確保した。部員数が多く、自転車で大移動である。交通事故等にも気を配った。たまたま、パンクする自転車が出た。練習の帰りに、自転車屋さんにもわった。

あの夏の生徒たちは、考える余裕などなかったことだろう。本人たちは気づいていなかっただろうが、着実に上手くなっていった。なぜなら、本気だからである。無我夢中というところだろう。夏休み中も、何度か大会があった。勝った試合もあれば、負けた試合もあったが、課題を確認するためには、いい機会となった。

そして、9月下旬になり、勝負のときがきた。支部新人大会が始まった。すでに力をつけていることはわかっていた。それでも、試合というものはやってみないとわからない。一進一退の接戦もあった。うちの選手たちは、競ると負けない。精神的に強かった。負けたとしても、納得がいく負け方だった。力を出そうとしていたし、出していた。根性があった。ガッツがあった。

あれよあれよという間に、支部大会、県北大会と勝ち上がり、目指す県大会に出場することができた。県大会でもシード校を破り、ベスト8まで進んだ。ここまでくると、すっかりチームは生まれ変わっていた。

あの夏を経験した女子選手たちとは、1年と4か月しか部活動での付き合いはない。だが、中身の濃い時間だった。今では、こうはいかないだろう。昔と今と、どちらがいいという話ではない。あの頃のやり方が正しいなどは思わない。もっと違ったやり方があったことと思う。それでも、何かしらのつながりを感じる。

教え子のラインの文面にあった。「仕事で悩んだ際には、高澤校長先生のブログ等を拝見させていただいております。〇〇〇〇と、会いたいと話しているところです」「ええ、何度涙を流したとか・・・。ぜひ、〇〇さんのことを書いてください。彼女は相変わらず何事にも一生懸命で変わりません。現在は3人の母親です」

何度も悔し涙を流していた姿は忘れない。あのときの生徒たちは、単なる思い出などではない。私にとっては、宝のようなものである。連絡などなくても、日々、悩み、苦しみながらも、精一杯生きていてくれれば、それだけでうれしいし、ありがたい。私もがんばろうと思う。